



Title	アイヌ文化の追体験学習 : 舞踊とトゥレプの採取・加工・調理を中心に
Author(s)	村田, 文江; 進藤, 貴美子
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 9: 23-33
Issue Date	1988-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8517
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

アイヌ文化の追体験学習

——舞踊とトゥレアの採取・加工・調理を中心に——

村田 文江・進藤貴美子

はじめに

昭和62年度前期の〈社会科教材研究A〉と〈身体表現論〉において、アイヌの生活文化を学ぶための合同講義をこころみた。講義内容は表1のように、舞踊と食—トゥレア(オオウバユリ)の採取・加工・調理—の追体験を中心にしたものである。合同講義としたのは、次のような経緯によっている。

アイヌの歴史・文化の学習は、さまざまな教科でこころみられているが、一般には社会科に位置づけられており、〈社会科教材研究〉にとって重要な課題のひとつである⁽¹⁾。しかし、社会科がともすれば子どもの生活実感をとまなわぬ知識伝達に終始し、それが社会科嫌いを生み出している状況を考えると、アイヌの歴史・文化の学習も単に「知っている」だけに終ることが懸念される。ちなみに本分校の学生の66%は、学校教育の中でアイヌに関する学習体験をもつが、現在の自分が知的理解も充分でなく、関心も高いとはいえないと、アンケートに回答している⁽²⁾。それだけに、アイヌ文化の知的理解をより豊かにする手だてが具体的に追求されなければならない。こうした模索を続ける〈社会科教材研究〉の村田に、アイヌ舞踊はひとつの道をひらいた。

進藤は、舞踊学習を動き、リズムの習得という側面だけきり離すのではなく、その舞踊を継承してきた人々の生活文化・歴史を探り、踊りに凝縮された伝承者たちの思いを学びうるような学習内容・方法を追求してきた。そうした視点から、昭和61年度前期身体表現論では、アイヌ舞踊学習とトゥレア実習をセットにして、アイヌの生活文化(舞踊も生活文化の一つとして位置づける)の追体験学習を実施した。

こうした進藤のこころみは、地域学習を生活

表1 講義内容

1	講義テーマ及び内容の説明、アイヌについての意識調査(アンケート)
2	アンケート集計結果の分析〈その1〉 関心度と学校教育への位置づけ
3	アンケート集計結果の分析〈その2〉 アイヌの現況について
4	アンケート集計結果の分析〈その3〉 日常的に耳にするアイヌ語の意味
⑤	アイヌ舞踊の実技〈その1〉チャクビーヤク、ホリッパ
⑥	アイヌ舞踊の実技〈その2〉イウタウポポ、ロホンリムセ、ポロリムセ
⑦	トゥレア実習のオリエンテーション ビデオ資料により採取・加工・調理の作業内容・手順を書き取る(※)
⑧	実習直前の確認——班編成、タイムテーブル・資料の配布、採取時の禁忌の説明
⑨	トゥレア実習〈その1〉——採取からでんぶん沈澱まで
⑩	トゥレア実習〈その2〉——でんぷんとりと調理から宴まで
⑪	アイヌ舞踊実技についてのレポートの総括、トゥレア実習のビデオ視聴及びレポート課題の提示
12	映像資料「石狩川 アイヌのたべもの」を視聴し、食生活の全体像をとらえる
13	アイヌ語地名について

社会科教材研究Aを中心に記載し、○印の各回が合同講義を示す。

※映像資料「フチとエカシを訪ねて」(第1編)

文化の場からとらえ直すことをめざす村田の視座と矛盾するものではなく、むしろアイヌ文化学習における追体験の有効性をさぐるという共通目的をうみだすことになった。それに加えて、トゥレフ採取地が大学に近接する利根別自然休養林にある地の利、アイヌ文化を研究し、道具づくりをも実践する黒岩俊生氏という人を得て、合同講義が実現することとなった。

以上の経緯をふまえ、講義はアイヌ文化の一般的知識伝達を最小限にとどめ、実技・実習による「からだで学ぶ」ことを主眼においた内容とした。それだけに、舞踊と食文化の追体験が学生のアイヌ文化認識にどう働きかけたかが問題である。

本稿では、(1)アイヌ舞踊体験を経て、学生がとらえてきたアイヌの舞踊観、さらに自然・神・人間観をレポートから探り、(2)トゥレフ実習の過程を学生がレポートに記したことばを綴り合わせた授業記録としてまとめ、若干の考察を加える。

I 生活文化としてアイヌ舞踊を学ぶ

〈合同講義での課題〉

これまで身体表現論、ダンスⅠ・Ⅱの受講生にアイヌ舞踊のいくつかを指導してきた。踊ることにテレを感じていた学生も最後には発揚してしまい、アイヌ舞踊は「楽しい」「面白い」「体力がいる」という。アイヌ舞踊を楽しんだという体験により、アイヌ文化をより身近かなものに感ずるようになったという感想を語る学生も少なくない。このように、踊ることの楽しさをストレートに体験させてくれるアイヌ舞踊は、それだけで舞踊教材としての意味が充分ある。また、それだけでなく初めてアイヌ文化にふれる者にとっては、「共感」という対象の理解への有効な働きかけをもたらすともいえる。

問題はその先である。アイヌ舞踊、アイヌ文化への理解にとって対象への共感、すなわち楽しさの共有だけでは充分でない。アイヌの歌舞は楽しみ事として生活の中にあつたというよりも、生きる為の必要としてあつたということへの理解が重要である。そのためにはアイヌの歌舞に凝縮された伝承者たちの思い、また、それ

らが生活や儀式の中にいきていた往時の生活、そして彼らの自然・神・人間に対する考え方を学びとることが課題となる。

昭和61年度の身体表現論においてトゥレフ実習を設定した意図は、以上のように楽しみ事としての歌舞に傾斜したそれまでのアイヌ舞踊学習を克服することにあつた。採取生活の一端を追体験することで、歌舞が生活の中に生きていたその生活をイメージすること。また、採取・加工・調理の過程での身体使用体験（足場の悪い沢筋でのウバユリ掘り、長時間のくり返し作業をあきさせない知恵、集団で作業する時の呼吸のあわせ方など）から歌舞を成立させたであろう生活の中の動きを体感することをねらつた。

食を得る行為にかけた時間、そして作業の大変さ、さらに森の神々への採取のあいさつという儀礼体験が重ねられて、受講生は一様に「自然の恵みや自然に対する礼儀、火や自然への感謝などを生活に関わるところで初めて実感した」と語る。こうした反応は、今回のトゥレフ実習での学生レポートにも表われている。

このころみは、アイヌの「生活文化への共感」という点では受講生の意識へ確かに働きかけるものがあつた。しかし、そこで追体験した採取生活の一端が舞踊とどのようにつながっていくのかということについては明確にならず、あらためて具体的な舞踊場面で、アイヌの生活、自然、神・人間観を逆照射していく内容と方法が課題となった。

〈舞踊学習の概要〉

曲目の設定は大きく二つにわけた。一つは、遊び、体力くらの要素を持ち、誰でもできて楽しめるものとして、チャクピーヤク（雨つばめの舞、平取）ロホンリムセ（棒の舞、釧路）、ポロリムセ（大きな輪踊り、静内）である。二つには、呪術的、信仰的要素を保存しているものとして、イウタウポポ（杵つき歌、静内）ホリツパ（輪踊り、平取）を扱った。

イウタウポポは、作業に伴う歌舞という点からもアプローチできるが、ここでは、「フッサー」とか「ヘッサー」のかけ声のもつ意味に注目した。すなわち、食べ物に魔をよせつけない呪言を唱えながらの作業ということである。また、

実習でトゥレアの莖・鱗莖についてデンプンを取るという内容が予定されていたので、杵つきの予行演習という意図もあった。

ホリッパは、日高の沙流川流域に伝承されているものであるが、他地方でいうところのリムセ（輪踊り）である。拍手をしながら両足同時に、あるいは片足ずつ左へ左へと寄せ足をくり返すという動作で成り立つ歌舞である。このように動作が単純であるだけに、それが舞踊として成立するためには、発声・動きが持続した動力源となるような水準が要求される。そうしたレベルに学習者を誘導することは、動作が単純なだけに難しさが予想され、これまで授業場面でホリッパを本格的に扱うことをしてきていない。(ポロリムセの内容に吸収して扱うことはあった。)

知里氏によれば、このホリッパは他地方ではニウエンホリッパ(いがむ・跳躍)とかニウエンアプカシ(荒い歩行)と同じ意味で使われることがあるという³⁾。このニウエンホリッパやニウエンアプカシは悪魔払いの踏舞行進と訳されている。その目的とするところは、コタンを守護する神々の関心と呼び、悪魔を威嚇することであった。村に凶事があった際、長老を先頭に男は太刀を女は杖を手にして気合いのこもった声や叫び声を発しながら、大地を踏みしめ踏みしめ行進するものである。

踊りを意味するリムセというアイヌ語も、「ドシンという音を発する」という意味で、ウポポ(歌)やタブカル(踏舞)と同義という。それらは踏舞の際の床や地面を踏みならず音に発している。先述の悪魔払いの踏舞行進は、ウポポ、リムセ(ホリッパ)、タブカルの源流と位置づけうる。

イオマンテなどの儀式の中で行なわれるウポポやリムセ(ホリッパ)は重要な役割を果たしている。そこで歌われる歌には神々を喜ばすような歌詞が満ちている。また、円陣をつくって祭場を浄め、魔を排除して善き神々との交歓の場をつくり出そうとする意志が働いている。歌うこと、踊ることは、このように人々が安全に生き伸びていくための真剣な行為としてあった。

ホリッパを踊ることで、そのような歌舞以前

の姿を体現できるかどうかは課題である。結果は、授業者の予想以上のものとなった。以下、二回の舞踊学習後に提出された学生のレポートに記述された内容を分類し考察する。

学生レポート25名分の内容を、レポート毎に要約カード化したもの158枚を分類した結果、次の三項目に大別された。

- ①アイヌ舞踊の体験で体感したこと、イメージしたことについて書かれていること。
- ②アイヌ舞踊をどのようにとらえたかということについて書かれていること。
- ③舞踊学習を経て、アイヌの生活・考え方について書かれていること。

それぞれの項目での特徴的な内容を紹介し、若干の考察をこころみる。「」内の言葉は要約カード化したもので、学生の氏名の頭文字、姓別を()内に記した。

〈アイヌ舞踊習得過程で感じたこと、考えたこと〉

「踊りを踊っているというかしこまった意識がない」(T. T 女)、「自然に手や足が動き、声ができる」(K. M 女)という評価があるように、「終始、とまどい、驚き、恥しさを感じていた」(T. Y 男)と告白している学生も含めて、まずは全員が揃って踊ることができるようになる。「声の高まりが自然に動きとつながり、徐々に盛り上げる」(M. S 女)、「体の内側からこみ上げてくるものによって手足が動かされる」(H. H 男)と実感されているように、「自然に」「内側から」発動してくるものがアイヌの歌舞には内包されている。それをある学生は、「一人一人の声が重なりひびきあい、一步一步大地を踏みしめていくような足音がひびきあって一つの歌舞をつくりあげている」(K. M 女)と評する。

とくにホリッパでは、「踊りというよりわき上がるエネルギー」(M. K 女)といったものが共通に実感されている。「魔が輪の中にしのびこまないように、となりの人との隔りを考え、輪をしっかりとものにしなければ」(K. M 女)と自らにいいかせつつ行為するうちに、そこに出現した世界を、「円の中心には異様なほどの気迫が集まる」(R. T 女)、「生命のエネルギーを感

じる」(M. O 男)と表現する学生もいる。「人間の発声は、どうしてあんな力をもっているのだろう」(R. M 女)と、これまでの発声体験では感じたことがない感覚を味わったともいう。その結果、日常感覚とはかなり異質な感情的世界へと、輪踊りを構成している個々人が誘導されていく事態が出現した。

こうした状態に対して、二つの異質な評価がなされた。一つは、「もっと踊り続けていたい快よさ」(K. T 女)、「体の中にずんずん伝わるものがある」(M. S 女)「気持ちのいいことをしたような感じが残った」(H. H 男)といった快よさの体感をベースにして、「大地と人間とのたしかながつながりを感じる」(K. N 男)とイメージしたり、自己と他者の関係に注目して、「こういう自然な踊りで、他人とのつながりを自然につくることがうらやましい」(M. K 女)とする評価である。

もう一つは、「一種の宗教のようでこわい」(H. H 女)、「一種異様な感じでおそろしい、こわい」(K. M 女)という評価である。輪踊りに出現してくるエネルギーに圧倒され、その流れにまきこまれていく自分、しかも抜けることのできない自分に驚き、「自分の内面があらわれてくるようでおそろしかった」(K. M 女)とも告白している。他者に対してあるいは集団の中で「踊ることのみならず、表現することの苦手な現代人」(N. T 女)と自己規定する学生は少なくない。そうであるが故に余計に、わけのわからないうちに強力な集団のエネルギーにひきずられる形で発声し踊ってしまう自分が、自己喪失現象を起こしたのではないかと恐れたのである。

そこまで、すなわち恐怖すら感じさせるほどに輪踊りが高揚したことに、正直いって授業者も驚いている。と同時に、そこに出現した集団のエネルギーがたとえ強力であったとしても、そこで自己喪失してしまうのではないかと恐れる学生が少なからずいたことも驚きであった。自らの中に出現したこうした状態を、ある学生は次のように考察する。「集団のエネルギーと接する経験がなくなり」、「他者との共存を意識しながら自然のエネルギーを体感することなどできなくなってしまった」「生死にかかわる人間の本能

的欲求がすべて見事に用意されている」現状では、「人間の精神エネルギーは負の方向へと進み、やがて生まれておびやかされるのではないか」(N. T 女)と、少々大げさかと思われるかもしれないと断わりつつも何故かそんなことを考えてしまったと述べている。

アイヌ舞踊体験から感じ取ったアイヌの生活信仰に対する思いはけっして浅いものではなく、「現代人に生活に密着した本当の踊りが、たった二度ほどの舞踊体験で理解できるのか」

(M. T 男)「アイヌの命がけの信仰がらみの歌や踊りを理解するのは困難」(H. N 男)と受け止める学生もいる。たしかに、所詮まねごとにすぎないウポポヤリムセでアイヌの歌舞の真の理解が成立するとは思わない。

しかし、それが快よさであろうと恐さであろうと、何らかの精神の高揚をもたらしたことは事実である。動きをなぞること、そして踊りにこめたであろう彼らの思いをイメージして踊ること、それによって体内に呼びさまされる感覚がイメージと相乗することにより、かつてアイヌが踊ったであろう生活に密着した儀式の中の舞踊を想像することの可能性は充分ありうると考える。

〈舞踊体験からみえたアイヌの生活、神観念、自然観〉

「神に近づこうとする手段として歌舞がある」(Y. H 男)、「生活の一部に踊りが存在」(H. N 男)、「アイヌの人々は常に自然に神に感謝して生活していた」(K. I 女)など、ほとんどの受講生が、アイヌ舞踊体験から彼らにとっての神、そして自然と神々と共存する暮しぶりを感じ取っている。

「生死に関わる信仰の具体化である歌舞」(N. T 女)という表現にみられるように、単なる楽しみ事ではない生きるための必要な行為としての舞踊の姿をとらえている。また、それだけでなく、「自然と暮らしているだけあって、動物の動きを適格にとらえている」(M. K 女)「動物の踊りには、アイヌの人々の個性・創造性がよくあらわれている」(Y. K 女)とあるように、自然に対して開かれた感性が、童子がみせると同じような柔軟な創造的行為を生み出すことへの着目

もなされている。

一方、「生活に必要な祈りをこめた踊りであっても、楽しさ（自分が体験したような）があった」(A. K 男)という記述に象徴されているように、必要が生み出した楽しみ事が独自に追求された結果としての多様なアイヌ舞踊の継承がなされていることへの気づきも見られる。

舞踊体験よりとらえたアイヌの生活、神・自然観を探り、逆にまたそうした暮らしぶりが多様な舞踊を創出する源泉であったとのとらえ方は、舞踊理解の上で重要な視点である。生きるための必要としての生活の中の舞踊が、楽しみ事として自覚的に追求されてくることにより内容の豊富化・多様化が実現するという系統発生的視点が、具体的な舞踊体験の中で学習者の中に確立する可能性がひらけてきたといえる。

ところで、特別の加工も飾りもない自然体で単純な所作のくり返しで成り立つアイヌ舞踊に対し、「本当の美しさは、生活との密接な関連の中で成立」(H. I 男)するのではないかと考えた学生がいる。また、アイヌ舞踊に身を置き、仲間とウコウクすることを通して自己表現されてくることを感じ取っていった学生は、「アイヌの歌舞は、人間の表現の本質をとらえている」(T. M 男)ともいう。こうした着眼は、アイヌ舞踊が人間にとって舞い踊る行為の持つ本来の意味や舞踊美の源泉といった舞踊認識上重要な視点へと迫る質をもっているのではないかと考えるが、このことについては別の機会にあらためて論ずることとする。

最後に、「体験」という学習形態に対して述べた学生の記述を紹介し、追体験学習の意味にふれてみたい。

「言葉より確かなものもあるのだと初めて知った」(H. H 男)「書物を通して考えるよりも実際に体験してみても考える方がはるかによい」

(K. O 男)「体験を通して学ぶ方が理解につながる」(Y. M 女)と、からだで知る、動きで知ることへの肯定的見解が多い。というより動きでこそ知り得る世界があるのだという発見があったとみることもできる。「祭場をおびやかす魔を払い善神をよびよせる人々の意志は、実際体験してはじめてわかる」(H. H 女)と書いた学

生もいるように、動きをなぞるという行為は動きだけを伝えるのではなくその動きを生み出した行為者の内面をも追体験することともなる。

「本来人間の真の理解は、その対象が事実であろうと身体運動であろうと、いずれにおいても状況に根ざした身体的行為が必ず伴っていた⁽⁴⁾」ということは確かである。であるならば身体的行為を通しての理解、すなわち体験を通しての理解という方法は、「人間の本来の理解のあり方の復権⁽⁵⁾」となるのではないかと思う。

II レポートで綴るトゥレブ実習の記録

トゥレブの採取・加工・調理の実習は、関係文献・映像資料をふまえ、できる限りアイヌの人々が実際に行っていた方法(道具も含む)、及び儀礼を踏襲すること第一義とした。事前学習は、ビデオをみて作業手順、方法を整理させた。ただし、調理については煩雑になるため、当日その場に応じて授業者が指示した。

実習後、次のような課題のレポートを提出してもらった。(提出者30名)

- ①自分が実際にしたこと、みたことを、時間の経過順に、できるだけ詳しく書く。
- ②楽しく参加できたか。
- ③実習を通して実感したことは何か。

表2は、①の課題に対する受講生の記述から適当な一文を抽出して、実習の過程をまとめたものである。これをみれば、実習の具体的内容を理解していただけると考え、ここではその詳細はふれないで置く。

②の課題は、トゥレブ実習を、各自の内容はさておき、感性的に評価してもらうために設定した。第一回の講義で、テーマと概要を説明したが、この時に必ずしも主体的に受講継続を決めた学生ばかりではない。それは、レポートにも「正直言って面倒だと思っていた」、「ハッキリいってあんまり積極的ではなかった」と率直に述べている(7/30名)。明記していないものを含めると、実際はもっと多いかもしれない。

結果的には、「いつのまにか仕事をしていたということで、一応は楽しんでやっていたのだと思う」という消極的評価から、「とても楽しかった」、「楽しめないわけがない」まで、それぞれ

表2 トウレブ採取と加工・調理の過程

実 習 内 容	受 講 生 の レ ポ ー ト に み る 記 述
<6月17日 採取>	
イタニ(根掘棒)づくり	<p>・トウレブタニによさそうな木の枝を探し、拾いながら歩いた。 (M. K 女)・いいトウレブタニが手に入れば、いいうばゆりがたくさんとれると思いついで、5、6本目で気に入った枝を手に入れる(R. T 女)・先端を掘りやすいようにとがらせた。なかなか堅い木で苦勞した (K. M 女)</p>
採取前の儀礼	<p>・参加者一同被りものや手袋をはずして、大きな木の前で中腰またはひざまずいて、祈りの言葉をのべるのを聞いている (K. M 女)・しんと静まりかえった中で、カムイノミをとる声と森のざわめきとが、何か荘重なものを感じさせた(N. T 女)・黒岩さんはすごく真剣でした (S. I 男)</p>
採取	<p>・雄の一株を見つけた。そのそばに雌の株がある。根掘棒でまわりをおこし、両手で茎をつかんで慎重にひき上げた(C. T 女)・自分の手で抜いてみて、あまりにきれいにとれるので感動 (K. K 女)・大きなものを掘りあてた時はとてもうれしかった (K. I 女)・だんだん、もっと大きなものが欲しいという気持ちができて、みんな必死だった (Y. F 男)</p>
沢からあがり、トウレブの根と葉を切り、束ねてから採取後の儀礼	<p>・トウレブがたくさんとれたことを感謝するためにカムイノミをした。みんな静かにしているので、風の音がサワサワとして、再び不思議な気分になった(Y. F 男)・神様に大きな2つをあげてお礼のお祈りをしてから葉っぱを山に返す(E. S 男)・うばゆりの葉を来年もたくさんうばゆりが採れるように祈りながら天上にバラまく (K. T 女)</p>
帰校して	
トウレブを洗う	<p>・うばゆりを1枚ずつはがし、水洗いをして虫くいをとり除き、茎を3つ折りくらいにする (K. Y 女)・どろが中にくいこんでいる (K. O 男)・とても地道な作業だった (M. K 女)</p>
トウレブをつきつぶす	<p>・「ヘッサオーホイ」と周囲の人が声をかけてくれる。杵の予想外の重さが災いして、つく人は声を出す余裕すらない(F. H 男)・歌と杵をつくりズムが合わずに苦勞した (T. M 男)・みるみるうちにねばり気が出てきて、本当にたくさんのでんぷんがあるんだなあと思った (K. K 女)</p>
繊維をしぼって沈澱させる	<p>・つきあがったものは樽に入れてたっぷり水を入れる。水の表面に泡があった。繊維からきっちり水分をとった (M. S 女)</p>
<6月18日 加工・調理>	
炉をつくる	<p>・3本の木を結びつけてナベツリをつくる。火打ち石を用いて火をおこす。自分で火をおこすのは初めてで、とても感動した。(A. F 男)・麻ひもをほぐしてガンピをおき、小枝をくべはじめた頃、豊川さんがダイナミックに木を積みはじめた。負けじとこちらも木をくべるが、組み方が悪いせいか消えかけてしまう(R. T 女)・豊川さんの火はすごく大きくなっていて、さすがと思った (Y. F 男)</p>

実 習 内 容	受 講 生 の レ ポ ー ト に み る 記 述
でんぷんをとる	・樽の水をもめん袋でこして、三番粉がとれました。少し緑がかっていました(H.F女)・一番粉があんなにしっとり、きれいなものだと驚いた(S.I男)・一番粉はさわると“キュッ キュッ”という音がする(K.M女)
石臼をひいて、米粉をつくる	・石臼の実物を見たのも、ひいたのも初めてで感動!!本当に細かな粉になるんだなぁと思った(K.K女)・少しずつ穴に落とし、その分が粉になって飛び散る様子は、「神秘的だ」とさえ感じるぐらい面白かった(M.O男)
いろいろな食べ物をつくる	○トウレブ(一番粉)、米粉、イナキビでシト(団子) ○トウレブ鱈莖入りサヨ(粥)——大正池の沢のミツバ入り ○トウレブ(三番粉)をヨブスマソウの茎に流し入れて蒸し焼き ○同じく、フキの葉で包み焼き ○トウレブ球根を灰の中で焼く ○マスの切身の串焼き ○マスの頭をチタタツ(たたき)にする——ミソ、ネギ、ギョウジャニンニクで調味。○マスのあらで三平汁——塩、ネギ ○お汁粉——シトにかけるため特別に作る
カムイノミ	・豊川さんが長老である。火の神に敬意を示して、シトやらマスを火にくべる。おみきが順にまわってくる。こうして、みんなで感謝の意を示して、これからのことも願う——のだろう(R.T女)・また風の音が私たちの上を音をたてて渡っていった。鳥が鳴いている。岩見沢はいい場所だなぁとしみじみ思う(M.K女)
宴	・すっかりお腹がすき、食べたらお腹をこわすのではないかと、あれだけいやがっていたのを、おわんをもってさっさとシトを2枚も入れて、おしるこをかけてあっという間に食べてしまった(N.T女)・何ともいえず美味しく、そしてうれしかった。作る途中に入ったダニなどの虫も、もう気にならず、とにかく Happy な気分のままに食べた。みんなの顔も、とても輝いていた(K.K女)

の思いは多様だが、全員が楽しかったと書いている。

ここで感性的評価を云々する力量はないが、実習という非日常的講義形態に対する、授業者の安易な一人よがりを反省する資料たりうると思う。

③の課題は、トウレブ実習の核心にふれるものである。「実感したこと」を率直に語ってもらうため、自由記述とした。したがって、アンケートのように项目的に整理はできないが、内容は次のように分類できた。

アイヌ文化についての感想…47.5% (19件)
体験することについての感想…30% (12件)

食を得る行為についての感想…20% (8件)
その他 ……………2.5% (1件)
[提出者30名、百分比は複数記述40件による]

〈アイヌ文化についての感想〉

アイヌ文化についての感想の中で、もっとも多かったのが、自然観、信仰観にふれた内容である(8/19件)

・決して欲張らず、自然を畏敬し、物を大切に
にする生き方は素晴らしい。こういう生き方
には生きるための知恵がみなぎっている。
(K.Y男)

・自然の恵を採ったり食べたりする時、常に
祈りをささげるアイヌの人々の生活から、

当時は本当に自然の力を恐れていたのだと思った。(T.M 男)

- ・私たちが神を意識することはめったにない。自然と離れた所での生活に、神の存在する場はないのかもしれない。(R.T 女)
- ・アイヌの、自然を神として常にそれに対し感謝する気持を持っていることは素晴らしいと思うし、それはあたりまえのことでもあると気付かせてもらいました。(K.I 女)
- ・アイヌの神の存在をなんとなく感じとった。(Y.F 男)
- ・すべての神に感謝する、現代の人間になかなか感じることでできないものを少しでも感じたことは、大きな収穫。(A.F 男)
- ・食に関する様々ないのり(カムイノミ)の存在の大きさもおのずと実感できます。(K.T 女)
- ・自分なりに解釈すれば、神々へ感謝の気持をもってれば、カムイノミという形式にこだわらず、声にしたり、心の中で祈りをもてばいいことだと思った。(K.N 男)

トゥレット実習において、学生にもっとも強い印象を与えたのは、カムイノミであったようだ。このことは、課題①において、採取前の儀礼の描写や感想に行を費すレポートの多さからもうかがえる(16/30名)。その中のいくつかを次に掲げておきたい。(表2参照)。

- ・それまで^{ひととき}大人気でざわざわしながら歩いていたが、一時、山のざわめきだけになった。時代がとにかく“今”ではなくなった。軍手をとってしゃがんで、“よろしくお願いします”と心の中でつぶやいた。(M.K 女)
- ・私達が何事もなく多くのオオウバユリが採取できるようにお願いするのだという。アイヌ民族はすべての自然物に魂が存在すると信じ、多くの神様に感謝をしながら生きているのだと実感した。(K.M 女)

この場の雰囲気は、神聖・神秘的・厳粛・荘重・おごそか・緊迫感・不思議な気分、とそれぞれに表現されている。2日目の宴の前のカムイノミもまた、みな空腹にもかかわらず、炉のまわりに静謐な気がただよい、祭主の祈りに集中していた。

アイヌ文化理解の要は、その自然観、信仰観

にあるとされるが、今回の講義では、一切の文献資料を提示していない。これにかかわるものとしては、舞踊(ホリッパ)実技と、山中での禁忌の説明だけであった。それゆえ、感想の内容は、知的認識というより、まさに学生が「からだ」でとらえたものではないかと思う。このことは、儀礼を、採取・加工・調理という作業と切り離さずに設定したことに大きな意義を見出すことができる。

アイヌ文化についての感想は、上記のほかに「身近に感じた」、「生活にふれたと思う」という素朴なものや、「うばゆりが欠かせないことがわかった」など具体的内容とともに、「異文化論を展開するものがあつた(3/19件)。

- ・異文化なのだという気がした。外からでしかこの異文化を見ることしかできないような気がした。その周囲の壁をとりはずす必要性があるかどうかはわからない。しかしこんなに身近に異文化を感じたのは初めてであった。(M.O 男)

M.O君は、採取を欠席している。翌日の加工・調理からの参加で、あるいは疎外感をもったのかもしれないが、「もっと面倒でただつまないだけかと思っていたが、けっこういろいろな意味で楽しめた」と総括している。

次にM.O君とは視点のちがう異文化論を掲げてみよう。

- ・日本人である私たちが、全々違った文化要素を含むアイヌ文化に触れるということがどのような意義があつたのか。(略)異文化に触れることによる自己文化の再認識である。というのは、ひとつの生事(?—引用者)の環境のもつ文化に没してしまえば、なかなかその文化の良い面、悪い面がうきぼりにされてこない。ただそのなかで流れる的に生活してしまい、創造性を失ってしまう。(H.I 男)
- ・異文化を知るということは、自分の未知の世界が開けるということで、視野が広がるということだ。そうすると違った角度から自分たちを見ることができ、今まで気付かなかった部分を知ることができる。(K.K 女)

二人の主張は同じだが、後者は、この後に次

のような一文を記している。

- ・実際に自分で体験してみても、少くとも、アイヌの人たちもこのようにして皆とおしゃべりをしたり唄ったりして、一連の作業をしたんだ、そして出来上がったもの食べたんだと感じたことが、アイヌ文化を知る糸口になると思う。

こうした認識は、今回の追体験学習のころを十分に汲みとってくれたものといえよう。

〈食を得る行為についての感想〉

学生にとっては、「電気器具にかこまれ」、「スーパーに行けばほとんどのものが手に入り、マッチ一本で火が手に入る」、いわゆる現代文明を極力排した作業と、手間ひまかかる時間の長さへの驚きが大きかったようである。

- ・苦労して自分で採ってきたものを全て自分たちの手だけでつくりあげ、そして時間をかけてやっと口にしたときの感動はやはりありました。(K.I女)
- ・自分たちの手で食を得たということに感じるところがあった。食だけであんなに時間を費す、(略)まさに生きるため、生きることそのものが目的。(M.K女)
- ・アイヌに限らず、昔の人々にとって食生活というのは、直接生死に関わっているのだと思った。(K.M男)
- ・これだけたくさんの手間がかかり、その作業は苦というよりむしろ楽しみであると感じた。(C.T女)
- ・日本の食糧自給率は、他の先進国に比べ低い、(略)我々はもう一度食について見直す必要がある。(S.I男)

食文化を実習にとり入れた目的は、食を得る行為が人間の生活の根幹であることをふまえ、相違よりは共通性を発見することによって、アイヌ文化に共感することができるのではないかと考えたことによる。それだけに、食文化の追体験とは、単に「食べてみる」ではなく、採取・加工・調理の一連の作業が不可欠であろう。

〈体験することについての感想〉

ここでは、アイヌ文化はさておき、野外実習という「日常では体験できない」、「新鮮な

体験」そのものについて語られている。紙数の都合で多くは述べられないが、次のような感想を挙げておきたい。

- ・ウバユリを掘るときの楽しみ。(略)きれいにとれたときの感じ。頭で考えているわけではなく、体がよろこんでいる感じで動くのです。(Y.N女)
- ・何ごとも自分自身でやってみなければわからないのだなということを感じた。(M.S女)
- ・共同作業をすることによって連帯感もあった。(M.K女)
- ・他研究室の人達と交流する機会であった。(N.A女)

以上、実習を通しての学生の感想を三つに分類してみたが、〈その他〉として、

- ・人間が知恵を働かせ、道具をつくって生活している時代のことと感じられた。(M.K女)

と、いわば“人間の歴史”を実感したものがあつた。

〈トウレツ実習を終えて〉

社会科教材研究Aでは、最終レポートに次の課題をあげた。

“アイヌ文化を学ぶ——教材化をめざして”をテーマとした本講義全般について、アンケート回答時と比べて思うこと

提出されたレポート(26名)から、受講以前と終了時の、アイヌ文化認識の軌跡をたどってみたい。

アンケート回答時については、「よく知らなかった」、「全く知らなかった」というニュアンスで表わしているものが多い中で、次のような率直な記述がある。

- a 知っているつもりだったが、あまり積極的に知ろうとしていないことがわかった。
- b あまり関心がありませんでしたし、別に知らなくてもいいと思っていました。
- c 全く別の、いわば外国人のようなかんじだった。
- d 何となく敬遠していたもの。
- e 偏見があったと思う。

こうした自己認識の表明は、講義を通して「と

らえ方、感じ方が確実に変化し、(略)興味をもって接することができるようになった」(上記 e) ことにほかならない。

アイヌ文化の知識・理解の定着を言挙げするものはなかったが、次のような表現が多数をしめている (15/26人)。

- ・アイヌについて少し理解したような、前よりも興味がわいてきたような、そんな気がする (Y. E 男)
- ・大学に入る前よりもずっと身近に感じることが出来る。(M. K 女)

—— 傍点引用者

「興味・関心・身近・少し理解」の具体的内容まで言及したものを列挙すると、以下の通りである。

- ・といっても、ただ単に新聞紙上でアイヌに関する記事が目止まるようになっただけですけど。(E. S 男) —— この他同種 2 名
- ・観光客並の興味関心から (民芸品がアイヌ文化だと思っている程度)、もう少し高度な興味関心 (どんな生活をし、それぞれの行為にどんな意味があるのだろうかと思うくらい) になったと思う。(R. T 女)
- ・多くの共通点と相違点を自分なりに理解することができた。(S. I 男)
- ・気障な言い方をすると、「アイヌの心に触れた」(F. H 男)
- ・私たち以上にとてもこの土地を愛してきた人たちとして感じるようになった (H. N 女)
- ・北海道にとって、アイヌがどんなに重要かを考えさせられた。(N. T 女)
- ・理解不足からアイヌという民族に対して不当な差別や偏見を持つてはいけないということを感じた。(E. S 男)

「興味・関心」が増したことは、少数 (3/26 名) ながら、「もっと知りたい」という積極的なかわり方を表明させた。

- ・この講義をうけても、まだ「わからない」「知らない」ことが多いが、知りたいと思うことが増えました。(H. F 女)
- ・今の私の心境としては、アイヌについてもっと深く考えてみたいと思っている。例えば、「旧土人保護法」にしても、アンケート

では法律の存在は知っているが、内容までは知らないと答えてしまった。これからも、おそらく北海道に住み続けるために、もっと自分の住んでいるところを知りたいと思う。(C. T 女)

- ・今は、アイヌについてももう少し知りたいことがあるし、知っておかねばならないことではないかと私は思います。子供達にも伝えていくべきだと思います。(K. M 女)

講義を通して、それぞれがどのようにアイヌ文化認識を深めていったか、それを測るものはない。結果をアンケートとしてとらえなかったのは、実技・実習という「からだ」で学ぶことから発せられる生身の「ことば」を知りたかったがためである。

今回のこころみは、一つにはアイヌ文化の追体験学習が、講義の枠内で実現可能かを検証することにあつた。この点は、地の利に恵まれ、多くの人の協力を得て、ほんのまねごとにすぎないと自覚しつつも、可能であるということができる。そして、アイヌ文化を楽しく追体験し、より身近なものとして興味・関心をもつという最小にして最大の目標も達成できたのではなからうか。

- ・受講して、自分自身の心の広がり、人間的成長があつたように思います。これは人間どうしがつき合った時と同じだと思います。人とつき合うと、その人の世界、考えにふれ、それによって、自らの成長の糧としてゆくからです。(S. I 男)

S. I 君のいわんとするところは、「身をもった体験」(同君)はまさに「人間どおしのつきあい」と同じ意味をもち、それがアイヌ文化への共感を生むのみならず、自己のあり方を照らすことにほかならない。

おわりに

他者を理解する、あるいは異文化を理解するためには、その人のからだになってみる、あるいはマネてみることを通して感じ取ることがまず第一に必要であろうという仮説のもとに、今回の「からだで学ぶアイヌ文化」のこころみがなされた。舞踊学習、トゥレパ実習後の学生の

レポートには、そうした学習への肯定的評価を読み取ることができる。

これまで、「体験」という、対象の世界へ「からだ」を投入する方法、すなわち「からだ」で対象をとらえていくというわかり方についてはその検証の困難さもあって十分に検討されているとはいえない。実際、本稿においても、対象への共感をベースにして、アイヌ文化への興味・関心を広げていくという道がひらけたというほどの評価しかできていない。「からだ」でわかる内容が具体性をもって抽出できないとすれば、その設定自体が問題であるという議論も成り立つ。

そうした批判を充分予想した上で、「本来人間の思考に密着した状況に根ざした身体的行為」⁽⁶⁾が、知的理解先行の学校教育に欠落している状況を思う時、追体験学習の意味とその内容・方法を探る課題は、ひき続き追求していかねばならないと考える。

註

- (1) 北海道教育委員会編『学校教育指導資料 アイヌの歴史・文化に関する指導の手引き』(昭和59年12月)
札幌市教育委員会編『アイヌの歴史・文化等に関する指導資料1(改訂版)』(昭和61年12月)
同上『札幌市小学校教育課程年間指導計画基底・社会』(昭和61年2月)
同上『札幌市中学校教育課程年間指導計画基底 社会科編』(昭和62年1月)
- (2) 本講義を実施するにあたり、学生125名(社会科教材研究A, 同B, 身体表現論の受講生)を対象に、「アイヌについてのアンケート」調査を行った。集計結果の全容は、稿を改めて考察する予定だが、関心・知識は下記の通りである。

非常に強い関心がある ……………1.6%
わりあい強い関心がある……………12.8%
ごくふつう……………56.8%
あまり関心がない……………24.0%
まったく関心がない……………4.8%

よく知っていると思う……………0%
ある程度のことは知っていると思う……………4%
あまりよく知らないと思う……………68%
まったく知らないと思う……………28%

なお、アンケートの設問項目は、次の資料から抽出したものである。

- 札幌市教育委員会編『アイヌの歴史・文化等に関する資料2 札幌市立学校教員(幼・小・中・高)のアイヌに関するアンケート——集計結果とその分析——』(昭和61年3月)
- (3) 知里真志保「アイヌの歌謡(第一集)」(『知里真志保著作集第2巻』 平凡社 1973年 p.320—321)
 - (4), (5), (6) 生田久美子「『わざ』の理解」(岩波講座『教育の方法8 からだと教育』1987年 p.104—105)

<付記>

トウレツ実習にあたり、多くの人々の御協力をいただいた。末尾ながら、記して深甚の謝意を表する次第である。

豊川重雄氏(札幌アイヌ文化協会会長)
大竹千壽氏(本分校用度係)
松下静子氏(同上)
片岡勝弘氏(舞台制作家)
竹内正明氏(岩見沢市教育委員会)
確井 広氏(同上 郷土資料室)
菱 直幸氏(本分校総合教育研究室4年)
丹野靖彦氏(同上)
前崎彰宏氏(同上)

なお本稿の執筆は次の通りである。

はじめに；村田、進藤
I；進藤
II；村田
おわりに；進藤

村田 文江
(本分校 助手 社会科教育)
進藤貴美子
(本分校 講師 総合教育)